

『華嚴經』に於ける如來の三業について (二)

中 村 薫

前回、如來の三業について考察するに当り、特に「如來と衆生」との問題を、唯一と無量との關係性に於いて明らかにせんと試みた訳である。その所以は、信の直接なる対象として見出された如來の三業も、如來の三業と限定した時、そこに、一体、機根の異なる衆生に對して、具体的に如何なる働きを有するのといった問題があつたからである。

そこで、今回、斯かる課題を踏まえつつ、更に具体的に『經典』に説かれていた内容そのものについて検討を加えていくこととする。

『如來の身業』

「如來名号品」を觀てみると、先ず文殊菩薩の來會について説いている。

「爾時世尊。知諸菩薩心之所念。即如其像現神通力。現神力已。東方過二十仏刹微塵數國。有世界名金色。仏号不動智。有菩薩字文殊師利。与二十仏土塵數菩薩。來詣仏所。」

恭敬供養頭面礼足。即於東方。化作蓮華藏師子之座。結跏趺坐。」

文殊は、東方金色世界の不動智仏の天より來會したと説かれている。そして、『經典』は更に他の九方に於ける菩薩の來會の有様について説示するのである。それらを列挙すれば左記の如くである。

- ① 覺首・南方栴色世界の大智仏の天より。
- ② 財首・西方華色世界の習智仏の天より。
- ③ 宝首・北方薔華色世界の行智仏の天より。
- ④ 德首・東北方青蓮華色世界の明智仏の天より。
- ⑤ 目首・東南方金色世界の究竟智仏の天より。
- ⑥ 進首・西南方宝色世界上智仏の天より。
- ⑦ 法首・西北方金剛色世界の自在智仏の天より。
- ⑧ 智首・下方玻瓈色世界の梵智仏の天より。
- ⑨ 賢首・上方如実色世界の伏怨智仏の天より。

このことは法藏が

「世界同名^レ色者表^ニ信位法相^ニ顕著^一故。仏同名^ニ智者表^ニ信中最
初^ニ始覺從^ニ本覺起^一故。菩薩同名^ニ首能表^ニ信是因初^ニ故^三」

と述べているが如く、世界が色の名を以つて仏が智の名を以
つて説かれてゐることは、信位の法相が粗大にして顕著であ
り、また信中の初めの始覺が本覺より生起することを表わさ
んがためである。そこに説主文殊菩薩の淨信を説く真実の意
味を伺うことができる。又、文殊菩薩とともに來會した他の
諸菩薩の名にも「首」の字を持つてゐることからも、信が菩
薩道の始めであり、因であることを意味しているということが
教えられる。

そして、更に『經典』は

「是時文殊師利菩薩。承^ニ仏神力^一。觀^ニ察大衆^一。歎曰快哉。今菩
薩會為^ニ未會有^一。諸仏子。當^ニ知^ニ仏利不可思議^一。仏住。仏國。仏
法。仏刹清淨。仏說法。仏出世。仏刹起。諸仏阿耨多羅三藐三菩
提。皆不可思議。何以故。十方諸仏說法。知^ニ彼心行^一隨化^ニ衆生^一。
与^ニ虛空法界^一等。何以故。此娑婆世界中。諸四天下教化^ニ一切^一種
種身。種種名。処所形色長短壽命。諸得。諸入。諸根。生処。業
報。如是種種不同。衆生所見亦異。何以故。諸仏子。此四天下
仏号不同。或称^ニ悉達^一。或称^ニ滿月^一。或称^ニ師子吼^一。或称^ニ釈迦
牟尼^一。或称^ニ神仙^一。或称^ニ盧舍那^一。或称^ニ瞿曇^一。或称^ニ大沙門^一。
或称^ニ最勝^一。或称^ニ能度^一。如是等称^ニ仏名号其数一萬^三」

と説き、更にそれぞれ十方の四天下に百億万の名号があると

『華嚴經』に於ける如來の三業について（二）（中 村）

説くのである。

斯くの如く、無量の仏号をして、文殊菩薩によつて正しく
法を説かせしめてゐることは、文殊菩薩の智慧は仏と同等に
して、その相好もまた仏と異なることがないことを意味して
いるのである。

法藏も

「初中何故問^ニ仏文殊答者^一。以^ニ即同^ニ仏慧^一故。吉祥妙慧達^ニ土海^一
故。増^ニ諸菩薩踴悅心^一故^三」

と、仏が問ひ、文殊菩薩の答える所以について三義述べてい
る。

この様に文殊菩薩が最初に信の対象として仏名不同につい
て説くことは、仏徳無量ということを説くことであり、それ
によつて更に唯一無量の意味を強調してゐるのである。（こ
の点に關しては拙稿「華嚴經に於ける如來の三業について」（一）、
印仏研28巻1号に詳説せり）

故に文殊菩薩が無量なる仏名を説く所以は、四天下の各々
の世界に各々無量なる衆生がいるため、その無量なる世界に
於いて仏の名もまた無量であるということを示すためであ
る。そして、仏名の異なつた例から説き始めることによ
り、更に仏徳無量なることを顯示してゐるのである。

以上の様に、仏名の異なつた例から説き始めて仏徳無量な
ることを説くことは、そのまま仏徳讃嘆であり、それによつ

『華嚴經』に於ける如来の三業について（二）（中村）

て仏名それ自身が如何なる意味を持つてゐるかを教えてゐることになる。

それは『經典』に

「是皆如来為菩薩時。有因縁者為度此故。種種方便。口業音声行業果報。法門極道議根所樂。令諸衆生知如来法。」と説かれてあることにより明らかとなるのであろう。

まさしく、如来がまだ菩薩であつた時、縁のある諸々の衆生を済度するために、種々なる権方便を以つて如来自身の覺つた法を知らせようとしてゐるのである。

我々はこの様な仏名無量を説いてゐる『經典』に対し、理解し難い一種の驚きを持つかもしれない。しかし、『經典』の意図するところは、何も我々を驚嘆させることにあるのではない。我々はむしろ仏名無量であることにより、自身に最も適した仏名を選択することができるのである。何故かといえば、その仏名は我々自身を救済すべき唯一無量なる仏徳であるはずだからである。

以上の様に、信の対象として仏名無量を説くことが第二会「普光法堂会」に於ける第一の説法（如来名号品）となるのである。

『如来の口業』

次に如来の名号の唯一無量なることから必然的に導き出さ

れたものが、初転法輪としての四諦の法（四諦品）である。

然して、法蔵が

「此品非是解四諦義。但明四諦名字不同故名四諦品」と述べてゐるが如く、ここでは四諦の個々（苦・集・滅・道）の意味を詳説して解釈するのではなく、ただ四諦の名字不同なることを示して、四諦の名称の無量なることを強調せんとしてゐるのである。

『經典』では、四諦の名字不同なることを説き、その最後の部分で

「諸仏子。如此娑婆世界及十方仏刹説四諦名。如是東方百千億不可量不可数不可思議不可称無等無辺無分齊不可説虚空法界等一切世界中。説四諦名。各有四十億百千那由他。隨諸衆生所應調伏作如是説。南西北方四維上下亦復如是」と説いてゐる。

これは一切世界の機類が不同であるから、四諦の名称も必然的に不同となるということを説いたものである。

法蔵は

「一為釈成前品末極道之義。二依前身業次弁語業故也。三前明能説之人名字不同。此明所説之法名字不同故来也。四答前問中仏説法問故。五為釈成前機所印成差別法中權教異相故次来也。」

と、如来名号品に次いで四諦品の説かれるべき来意について

五義を以つて明かしている。即ち、総じて能説の人の名字不同なることによつて所信の法もまた不同であるという説き方が示されているのである。

然しながら『經典』に

「隨諸衆生所_レ應調伏_二作_三如是説_一」

とあるが如く、身・口・意業を衆生の機に應じて調和し、諸々の悪行を制伏し除滅せしめることが主眼であり、従つて四諦の名が如何に異なつても四諦そのものの根本的意味に変わりはないのである。

なのに何故ただ四諦の差別のみを顯わすのかというと、法藏が、

「又何故唯顯_三四諦差別_一。謂是權教差別易_レ知故。又為_レ寄_三顯法故_一」

と指摘しているが如く、權教（この場合、大乘に入る一手段としての仏道で、一乘真実でない仮の教え）の差別は知り易いためであり、又、法を寄顯せんがためである。それ故に四諦の名の無量なることは、信の対象たる如来の法の徳の無量なることを顯わすことになる。

また、文殊菩薩によつて先ず「四諦品」が説かれたことについて、法藏は

「何故文殊説者。明_三妙慧善達_二実諦義_一故。」

と述べている。

『華嚴經』に於ける如来の三業について（一）（中 村）

特殊的な無量の名を説き示すことによつて、それが同時に普遍的なるものを知ることとなり、而も同時に無量なる衆生に應ずるものともなるのである。

斯くの如く、妙慧が善く実諦の義に達するということは、結局仏教の根本が四諦ということで顯わされていることを説き示しているともいえる。

- 1 六十華嚴卷四「如来名号品」第三（大正9・418・b）。
- 2 探玄記卷第四（大正35・169・c）。
- 3 六十華嚴卷四「如来名号品」第三（大正9・419・a）。
- 4 探玄記卷第四（大正35・170・a）。
- 5 六十華嚴卷四「如来名号品」第三（大正9・420・b）。
- 6 探玄記卷第四（大正35・171・b）。
- 7 六十華嚴卷五「四諦品」第四之二（大正9・422・b）。
- 8 探玄記卷第四（大正35・171・b）。
- 9 前掲7に同じ。
- 10 探玄記卷第四（大正35・171・c）。
- 11 前掲10に同じ。

（同朋学園仏教文化研究所研究員）